

障害者と災害を考える（第4回リハエ ミライ・アッセンブリー）

尾上 弘基

東京大学先端科学技術研究センター

1. はじめに

2024年1月1日に発生した能登半島地震により被害にあわれた皆さまへ、心からのお見舞いを申し上げます。2024年1月8日に行われた第4回リハエ ミライ・アッセンブリー“障害者と災害を考える”を聴講し、新しい視座や多くの刺激を得たため、ここに報告を述べる。

2. 概要

2.1 プログラム

- ① 挨拶、ミライ・アッセンブリーの目的説明 5分
- ② レクチャー「災害キャンプをやってみた」20分
- ③ 「障害者と災害を考えるフリーディスカッション」30分
- ④ まとめ 5分

2.2 内容

第4回リハエ ミライ・アッセンブリーは関東・甲信越支部の協力のもと行われた。能登半島地震の発生に伴い、参加者の災害に対する意識も非常に高くなっており、それぞれの立場から障害者と災害に関しての様々な意見が聞かれた。詳細を以下に述べる。

まず、能登半島地震に際して交通手段が長期間に渡って断たれ、復旧や支援物資の滞り中、障害者がどのような対応をするか、果たして避難所生活を安全に送ることができるのかといった具体的な内容について議論があった。この話題において印象的だったのは、衛生管理や医療的ケアの不十分な災害直後の避難所生活を選択するのか、住居に留まり生活

を送るのか、その選択を迫られるという議論であった。筆者はそのどちらにも大きなリスクが含まれていると感じ、日常生活を介助とともに生活している方の緊迫した発言を聞いて衝撃を受けた。

また、災害は地震だけではなく豪雨や火災、3.11の際の首都圏における帰宅困難などといった様々な様態があり、知っておくと有益な情報として、キャンプの知識が紹介された。実際にキャンプ場に障害者を含む関東支部の方々が赴き、マットレスの圧分散を調べ、ビニール袋で米を炊き、キャンプ用の食品を調理して食べ、昨今普及が進んでいる大型の持ち運び可能なバッテリーの有用性についても調査したとのことであった。その中で筆者が重要だと感じたのは、実際の状況を想定した訓練である。コロナ禍でのキャンプ人気もあり、ネットには様々なアイデアや商品が存在する。一方で電気の制限される環境ではそれらにアクセスすることは叶わない。ゆえに普段からキャンプに馴染んでおくことで、いざという時に想起できるようにすることが必要であると感じた。

ほかに、普段から備えておく手段として、ローリングストックや定期的な複数の避難経路の実際の移動が挙げられていた。熱源や電源の確保は事前の準備なしには対応が難しいとの話題や、様々な災害の状況に応じた段階的な準備が必要との話題もあり、これらは筆者もまだ準備ができておらず認識が甘かったと痛感した。

特に災害時に障害者が困ることとして参加者の中で共通の認識があったのが、医療的情報である。非常時にかかりつけ医以外で薬やケアを必要とする場合、かかりつけ医を通して情報を伝達することは困難であり、自分の医療的情報をアナログ媒体で所持しておくことでその対処ができるといった話題を聞き、筆者も普段関わることのある障害者にあらため

て伝えようと考えた。

3. おわりに

今回のセミナーを通して感じたことをまとめる。災害時には自分自身で判断しなければいけない機会が

沢山訪れると知った。電気が途絶えると判断材料である情報さえ集めることが難しくなる。ここまでお読みくださった方にはぜひあらためて事前の準備を確認していただき、事後は手に手をとって行動していただきたいと切に願う。